2008年（平成20年）
第3号
（3月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

佼成会の政治に対するスタンス「五原則」について（後半）

前回の政治に取り組む「五原則」の続きです。

３．「思想・良心・信教の自由を守る」について

「信教の自由」は、その他の自由と同様、人間が本来生まれながらに有する、生きていく上での最も重要な権利の一つです。

しかし、信教の自由は他の自由と比べ、一般的に国民の関心が薄いと言われ､宗教者が十分な監視をしていかないと、侵されやすい自由です。そのためにも本会は、宗教教団の立場から信教の自由を護り、侵されそうになったときには全力でこれに対処します。

４．「政教分離の原則を守る」について

この「政」は政治権力、「教」は宗教団体のことで、政治権力と宗教団体を抑圧したり、宗教団体が政治権力と結びつくことに反対します。そこで、本会は、直接、間接に関わらず、特定の宗教団体による政治上の権力の行使を認めず、政党をつくらず、特定の政党・政治家を固定的に支持せず、また教団役職者を役職者のまま政治家にすることはしません。

５．「政治倫理の確立」について

近年、選挙の投票率の低下は著しく、民主主義の根幹を揺るがす問題となっています。その要因として、政治家のモラルハザード（倫理崩壊）が挙げられます。本会は、各議員に対し、宗教心に根ざした判断、行動を強く求めます｡それとともに、国民自身も政治の主権者としての自覚を高め、自らの倫理観の向上をはかっていくように努めます。

「明るい社会づくり運動」について

「明るい社会づくり運動」は 1969 年、提唱者である庭野開祖の「自らの生き方を正し、社会を明るくしようという志を同じくし、“社会の一隅を照らす人”を一人でも多くつくろう」という理念のもとに､「全人類が人間本来の姿に返り、本質的に目覚める」ことを目的として始まりました。この呼びかけに賛同する人々が、地域から「善意の心を呼び起こし、真の人間性を開発していこう」と奉仕活動や社会活動、さらには平和活動などの行動を起こし、その輪が全国に広がっていったものが現在の「明るい社会づくり運動」です。

そして、地域の福祉や平和のために活躍している諸団体と連携して最も身近で緊急の問題に取り組み、都道府県や市町村の実施する事業や催しに協力することで、地域社会ばかりでなく行政側からも多大な評価を得てきました。

現代社会では、凶悪犯罪の多発、青少年や高齢者の自殺問題、家庭崩壊やいじめなどの問題が起こっています。これは身近な問題であるにもかかわらず、ややもすると直接自分の身に降りかかってこない限り「自分の問題」として受けとめはしません。

社会問題と自分を分け隔ててしまう感覚の背景には「自分さえよければいい」という利己的な考え、あるいは「自分一人が何かをしても、世の中はそうそう変わるものではない」という無力感や虚無感などがあると考えられます。しかし、仏教では、人々はだれ一人として社会から孤立して存在しているのではないと教え（縁起の法則)、お互いに関連し合って生きていることをはっきりと認識できた時、はじめて、社会で起こっている問題の解決が見えてくるでしょう。

人々の幸せを実現するために、このような考え方によって展開される「明るい社会づくり運動」が国民運動化されるよう取り組んでいきます。

時事刻々

昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と言われているが、蛇口から出る水にも、肌に触れる空気にも、柔らかさを感じる季節になってきた。

このような時期になると、「春眠暁を覚えず（春の眠りは心地よいので、ついつい寝坊をしてしまった）」で、しまったと思う経験をする人も多いことだろう。

確かに、２月の京都の平均気温は三・六度と昨年の七・三度に比べると厳冬だったことが分かる。それだけに、春の暖かさはありがたく思う。

ところが、百年前の冬の気温が三度前後だったものが、この十年間では五度前後と、平均二度も上昇した。これも、地球温暖化の影響だろう。

気温が高くなり、春眠を続けているうちに、異常気象や天候異常で、おちおち眠っていられなくなるかも知れない。

そうならないうちに目覚めて、人々の叡智を集め、温暖化が進むことにストップをかけないといけない。

諸宗教対話のコーナー

宗教協力

庭野開祖は、山田恵諦猊下と昭和４９年１２月に第２５３代天台座主になられ、昭和５０年２月に延暦寺へ参拝しはじめて懇談されて以来ご遷化される昭和６０年までの２０年間に３８回の交誼を結ばれ（ほぼ１年に２回）ました。開祖とお座主さまはお酒を酌み交わしながら懇談されることも多くありましたが、話の内容は決まって仏教・法華経の話に始まって、最後には世界平和のことにおよんだそうです。「お二人の頭の中は平和しかなかったのでは」とよく同席された天台宗の小林先生は語っておられます。

滋賀県坂本にあるお座主さまの一室には『一念三千』と大きくか書かれた書画が掲げられているそうです。その部屋で開祖とお座主さまは常に世界の平和を願い、そして一人でも多くの人が救われることを願い、その一念が広く世界の宗教者へ伝わり、ＷＣＲＰ（世界宗教者平和会議）を成功に導いた原動力になったにちがいありません。

願いを共有する同士が居た事は開祖にとって何よりも力強かったと思います。山田座主と同じく、開祖にとってもう一人同士といえる方がおられます。中国佛教協会会長の趙樸初先生です。趙先生は「共に霊鷲山においてお釈迦様から法華経を聴聞した中だ」と語られました。

本会が宗教協力に力点を置いている背景には、こうした開祖と志を同じくする多くの先達の存在なしには語れるものではありません。

私たちの平和活動コーナー

全国車いす駅伝ボランティア

先月２４日(日)、京都市内で第１９回全国車いす駅伝競走大会が行われました。主催団体が数多くある中で「ユース２１京都」も名を連ね、加盟している立正佼成会京都教会青年部も前日の受け入れから多数のボランティアを派遣しました。(「ユース２１京都」については２月号参照)

前日は宝ヶ池国際会議場の駐車場で受け入れ担当でした。ここ数年変わらずこの場所でのボランティアです。関東や九州から自家用車で来られた方の駐車スペース案内と降車介助ですが、感心させられるのは車の乗り降りも荷物の上げ下ろしも、だいたいの方がご自身でされるということです。こちらも慣れないうちは「ボランティアしないと…」思うのですが「何かお手伝いすることがあれば言って下さいね」とだけお伝えして待機しておくだけでいいのです。つまり人それぞれ必要な介助は違うわけですね。

大会当日は各走区を走り終えた選手が西京極総合運動公園に集合されるため、京都バスからの降車介助です。選手のみなさんは悔いのない走りが出来た様子で、すがすがしい顔が印象的です。

実は選手の多くは事故により下半身が不自由になりました。日頃の生活から一転、暗黒のような未来の中からこの駅伝の存在を知り、情熱を注がれるようになったそうです。そのような強い精神力やエネルギーを、毎年、このボランティアを通して感じさせていただいています。

佼成会ミニ知識

会歌

１９６６年（昭和４１年）会歌が制定されました。題名は『教えあおげば』、その歌詞を紹介しますと

「１．**さわやかに　昇る朝日よ**
へだてなく　めぐみをそゝぐ
みほとけの　教えあおげば
われにあり　きょうのほゝえみ
あゝ立正佼成会
２．**すゞやかに　生きる明るさ**
あふれくる　ちからを寄せて
みほとけの　道につどえば
われにあり　あすのよろこび
あゝ立正佼成会」です。

「♪さわやかに～」と始まる会歌を斉唱しますと本部大聖堂の周りが青空いっぱいですがすがしい朝を迎えているという印象を受け、また「♪へだてなく　めぐみをそそぐ～」では法華経の薬草の譬えを思い出します。きっと歌詞を書かれた方は佼成会の教えをご存知だったに違いないでしょう。

また物事が思い通りにいかず落ち込んでいたり、悶々とした毎日になっているときにこそ「あふれくる力をよせて」と言える自分でありたいものです。その根本は教えであることには間違いありません。教えを学び歓喜あふれた笑顔で会歌を斉唱させて頂きましょう！すべては「われにあり」！

企業経営と平和のコーナー　「仏教を仕事に生かす」

■経営論

ヒト、モノ、カネ。会社を構成するものはこの三つである、とはよく言われることです。だが実際はどうでしょう。人を大事にしないで、モノとカネのみが表面に現れる経営が増えてきています。特に経済界、経営学といった理論の世界になると、この傾向が強く出ています。経営の担い手である人間は忘れられ、モノ、カネのみがクローズアップされているのです。

■事業の目的

そこで会社は何の為にあるのかに立ち返って見ると、ヒトを忘れてカネが目的になっている奇妙さがはっきり見えてきます。この世で人間が作ったものはすべて人間に役立つ為に存在しているはずです。会社も例外ではありません。そこで会社は人が目的であり物とカネは手段である、という見地に立ってみますと、そのヒトとはまずお客様です。どんな会社でも、お客様が消えたら経営は成り立ちません。最も大切なのは、お客様の満足であるということです。会社は物やサービスや技術を売るのが目的ではなくて、それらによってお客様に満足して頂く事が最も大切なのです。

■経営の常識を変える

経営における常識の間違いは、ヒトを忘れてモノとカネを目的とした所から出てきたと言えるでしょう。バブル崩壊後、欠点の追及がさかんなようですが、それが人を萎縮させ、悪循環を生んでいます。高度成長期、物流業界はトンキロ競争に走りました。間接部門は価値を生まないから、直接部門にウエートをかけるということもよく行われました。

だが、この常識に逆らって間接部門も宝の宝庫であると考えた人がいました。クロネコヤマトの宅急便でお馴染みのヤマト運輸の小倉昌男さんです。大規模な運送会社がやりたがらない集荷と配達に焦点を絞り、大型トラックを売り払って小型トラックを装備したのです。それまで運輸業者が対象外にしていた郵便小包も取り込み、全国に広げていきました。

この例を見てもわかる様に、人が不都合と感じていることを引き受けて、徹底的に合理化し、それを効率的なシステムに仕上げることによって、ビジネスは成り立つということです。

■合理化とは

合理化とは無駄を省くことだ、ということもまかり通っている常識です。しかし無駄を省いた合理化がうまくいったという例はほとんどありません。無駄なものはないのです。世の中の変化につれて、ものごとの必要性も当然変わってきます。決して無駄ではないが世の中の変化によって、違うものがより必要になったから、限られたエネルギーをそちらへ集中する。こういう考え方が必要です。

■知・情・意

経営について考えると、何よりも大切なのはヒトに対する考え方だと思います。そのヒトを構成するのは、「知・情・意」であります。「情と意」が心の中心です。「情」は優しさに、「意」は辛抱や持久力にかかわります。その上に「知」がのることによって、バランスのとれた判断ができるのです。

■人事考課

会社では人事考課というのを行っています。その人事考課は、多くの場合、昇給や給与に使われています。つまり人をお金で計るのが人事考課の実態と言っても間違いありません。人をお金で計り、差をつけることで競わせているのです。このような「情・意」の上に「知」がついている姿がそこにはあります。

■年功と能力

多くの企業が年功主義を放棄し、能力主義に切り替えています。金で人に差をつける。その差を大きくすればするほど人は働くし伸びる。これが能力主義の考え方ですが、これは間違いです。

今の業績は先人が残してくれた功績によるものです。しかし、未来を築くのは、社長や部長などの経営判断能力と、若い人の挑戦力、行動力です。このような意味から、「功あるものには『禄』を与え、能あるものには『職』を与える。」これが人事の基本です。

■人間の心理

能力主義は、どうしたら人をよりよく働かせるかが基本的な発想です。そこには人をモノとカネのための手段と見て、人間の本質を見ていないという欠陥があります。人はどういう時に生き生き働くか、どういう時に喜びを感じるかを考える必要があります。

本来、人はあらゆることを喜べる命を授かっている、とよく言います。生きがいとか幸福というものは、貧乏でつらくても、愛情を傾けることができる何かを見つけ、それを見つめ続けることから生まれると言います。そして、それにより、人間は喜びを発見するのです。この人間の心理をよく理解して、人を生かす経営が求められるのです。

■事業成功の鍵

会社は人間が目的であって物や金は手段にすぎません。お客様がいなければ会社は存在し得ません。そのお客様を満足させる働きを生み出すのは社員であり、その社員は血の通った人間です。家族が幸せであり、満足している時に一生懸命働きます。そのサービスにお客様が満足して下さることによって成り立ちます。社員と家族の幸せ。これは会社存続の基盤であり、時代によってその提供する商品やサービスがどう変わろうと、おろそかに出来ないことです。事業はその関係者と家族の幸せによって支えられるのです。

庭野開祖の宗教観･平和観　「一乗の道」

20 世紀半ばまでの世界宗教界の歴史

1965 年の第二バチカン公会議が開かれるまでの世界の宗教界は対立の歴史でした。庭野開祖は著書の中で次のように述べています。

「宗教の歴史を見る限り、残念なことだが排他独善の宗教の方が成功しているように見えることが多い。ほかはすべて邪教、この宗教でないと救われないと真っ向から一刀両断にふり下ろすような説き方は、まことに簡単で、大衆も信じやすい。

しかし、それでは本当の宗教とは言えないのではないか、いつか、その説き方が命取りになりかねない。そうした排他独善の宗教のひとつが、バチカンのカトリックではないかというのが、私の当時の印象であった。カトリックによらなければ天国に入れないということになったら、他の宗教を信じる人は地獄へ行くしかなくなってしまう。

1517 年のマルチン･ルターによる宗教改革からこのかた、キリスト教はカトリック(旧教)とプロテスタント(新教)とに大別されるようになっていました。カトリック側は、プロテスタントを異教として扱い、その信徒を迫害しました。

両信者の憎しみ合いから、カトリック信者とプロテスタント信者との結婚は認めない、と言う規律も作られ、そのために若い男女の悲劇を数多く生み出したりしました。それどころではなく、両信者の憎しみ合いから、戦争までもが引き起こされされました。

今でも北アイルランドでは、そうした争いが続けられています。昭和 37 年から 39 年ころにかけて、私はカトリックの総本山であるバチカンが他宗教に対して、胸襟を開こうとしない姿勢に疑問を抱き、それを様々な場所で訴えていた」

キリスト教はイエスが提唱した後に、カトリックと東方正教会に分裂します。またそこから 16 世紀にプロテスタントと英国教会に別れ、お互いに激しい戦いをしました。イスラム教もマホメットによって起こりますが、やがてスンニ派とシーア派に分裂します。いまイラクで激しく戦っているのは、この二つの派です。

仏教もお釈迦様が開いたわけですが、上座仏教と大乗仏教とに別れて、上座仏教はスリランカや東南アジアに伝わり、大乗仏教はアジアから中国・朝鮮・日本に伝わりました。

現在、世界に約 60 億の人口がありますが、その内の 50 億人(約 8 割)が何らかの宗教を持っていると言われています。その中で一番多いのはキリスト教で約 21 億人です。次がイスラム教で約 12 億人です。いま伸びているのはイスラム教です。そして仏教は約 4 億人弱です。これが世界の実情であり、そしてそれぞれが争っていました。

1965 年第二バチカン公会議への招待

1965 年に、このような世界の宗教界に変革をもたらした歴史的な変化が起こります。新宗教新聞の同年 10 月 20 日号の「論壇」で「カトリックの大転換」と題し、次のように論評しています。

「このたび、第二バチカン公会議で『信教の自由』テキストが 1997 票対 224 票で可決されたと報道されている。これは、今までのカトリックに対する世界中の理解と考え方からすれば、まったく想像さえもされなかったことである。というのもカトリックは神につながるものは自分だけであり、自分だけが真理の唯一の所有者であると信じ、他の宗教者を認め、ともに並ぶことを拒否してきたからである。

また、1963 年 9 月に開かれた第二会期には、日本基督教団から同志社大学の土居眞俊教授がオブザーバーとして招かれ、引き続き 1965 年の第三会期にもゲストとして招かれたと言う。これは日本プロテスタント 100 年の歴史にかつてなかったことで、カトリックに関して、そんなことは夢にも考えられなかったことである。

単にそれだけではない。**仏教徒である立正佼成会の庭野会長が、ゲストとして招待されているからである。**これこそ、土居教授がオブザーバーあるいはゲストとして招待されたことより、遥かに遥かに重大事件だと思えるからである。ともかく、今までの宗教の歴史から見ても、いままでのカトリックの本質的なものから考えてみても、想像を絶した大転換が始まろうとしていることは確かである。」

これが新宗連(新日本宗教団体連合会)が論評として出した記事です。宗教の歴史の中で、かつてなかった大転換がこの 1965 年(昭和 40 年)に起こり、その最大のゲストになったのが庭野開祖だったのです。

(つづく)

渉外部からのメッセージ

３月に入れば暖かくなるのかと思えば、いまだに寒さを感じる日もあります。そういう中でも少しずつ春の訪れが見えてくると心も温かくなるような気がします。同じような７０年前の３月５日、立正佼成会は創立されました。現在と大きく違うのは日本が戦争へ向かって歩み出していたということ。「人を救い、世を立て直す」。私たちも肝に銘じなければなりません。

この「平安月報」は下記アドレスからダウンロードできます。是非、ご覧ください。

http://www.rkk-kinki.jp/kinki/thats_kyoto.html